

学校外で「学ぶ」子どもたちと スクールソーシャルワーカーの関わり

文部科学省 フリースクール検討会議

平成27年3月26日

スクールソーシャルワーカー／上智大学総合人間科学部社会福祉学科 横井葉子

紹介する事例（模擬事例）

ーフリースクール、教育支援センター（適応指導教室）、児童
相談所につながっていない子どもたち

（本文中の赤字部分がスクールソーシャルワーカー＝SSWの関わりを表しています）

- 発達障害・ひきこもりの事例
- 安否が確認できない事例
- 親がパワーレスな状態のひとり親家庭の事例
- 生活保護世帯の非行事例
- 弟妹の世話を担う事例

発達障害・ひきこもりの事例（中学生）

—家庭訪問相談員、保健所との連携

- 幼児期から感覚過敏、多動性などがあり集団生活が苦手
- 小学校低学年のとき発達障害の診断、徐々に不登校出現
- 教育委員会から家庭訪問相談員（心理士）が定期訪問
- 中1から完全欠席、部屋にひきこもり出てこない
- 母の精神的不調が出現→家庭訪問キャンセルが続く
- SSWが保健所の精神保健福祉士へ家庭訪問要請、訪問を仲介
- 保健所の精神保健福祉士が母に母子の医療機関受診を勧める
- 受診、治療開始、長期にわたる支援が必要と確認
- 卒業までに保健・医療・福祉の支援チームを作ることが課題

安否が確認できない事例（小学生）

—情報収集の支援、市町村、保健所との連携

- 小学校高学年で他市から転入、当初から全欠席、保護者が子どもを登校させない
- 学校から担任が継続的に家庭訪問を続けるが応答がない
- 教育委員会からの呼びかけにも応じない
- ポストに入れた学級だよりや手紙は受け取られている様子
- 民生委員によれば、夜間は明かりがついているという
- 虐待の様子は無いが、子どもの安否が確認できなくなって2週間経過
- 市町村の「居所不明児童対応の流れ」に従って学校・教育委員会が対応、市町村の居所不明児童所管部局が事務局となる
- 並行してSSWが学校・教育委員会・関係機関・民生委員等地域住民と連携しつつ他市から過去の情報を収集、SCとともに情報整理
- 保健所の精神保健相談事業を利用して嘱託医からコンサルテーションを受ける
- 市町村主催のケース会議で実効性が高いと思われるプランを提案、実行

親がパワーレスな状態にあるひとり親家庭の事例（中学生）－母子相談員、DV相談員等との連携

- 父の借金がもとで離婚した直後の母子家庭の中学3年生
- 離別した父が母子につきまとい、暴言・暴力、金銭を無心
- 不登校の出現（母が心配で学校に行けない、意欲低下）
- 学校の給食費、教材費の滞納が続く
- SSWが家庭訪問、母と面接して児童扶養手当申請が受理されていないことを把握、母は子の中学卒業後に転居して生活保護受給を希望
- 主任児童委員とともに、母の児童扶養手当申請に同行、代弁
- 市町村窓口の母子相談員を紹介し、進学費用の貸付制度を情報提供
- 母を市町村のDV相談員につなぎ、父への対策を講じ、市外転居を支援する

生活保護世帯の非行事例（小学生）

－市町村の要保護児童対策地域協議会、生活保護課、警察との連携

- ひとり親家庭のきょうだい
- 生活保護受給世帯
- 親の夜間外出が多く、深夜子どもだけで過ごす様子が把握されている
- 全く登校せず、昼間中学生と遊んだり喫煙するのを目撃されている
- いじめの加害者になったり、下級生を脅したりする
- SSWが学校・教育委員会とともに市町村の要保護児童対策地域協議会の事務局にネグレクトの実態を情報提供、要保護児童対策地域協議会による見守りネットワーク構築を要請
- 生活保護課に定期的な家庭訪問を要請し、保護費受給日に親が来庁する際に教育委員会との面接も設定して登校を奨励することを提案。また、生活保護課の子ども支援員の関わり（家庭訪問）を要請
- 学校に警察の少年サポートセンターとの連携を提案

弟妹の世話を担う事例（中学生）

SC、校内の「別室学級」、市町村との連携

- 市外から転入、転入時から全欠席（小学校からの不登校）
- きょうだい（乳児含む）の数が多し
- 弟妹を保育所に送り迎えする姿が目撃されている
- 担任の訪問に応じない
- SSWが家庭訪問、子どもが家事育児を担っている生活実態を把握
- 子どもに学校に別室登校する生徒のためのクラスがあることを情報提供
- 別室登校を迎える学校の体制を調整、SCの関わりを学校に要請
- 学校管理職、教育委員会と相談の上、学校から市町村の要保護児童対策地域協議会の事務局に家庭の実態を報告・相談、見守りネットワークを作る
- 母子保健を所管する部局の保健師と連携し、親の支援方法を検討

まとめ

- 背景にある親の困窮状態
- 家庭の中で起きていることが見えにくい
- 義務教育期の不登校によって問題が顕在化している
- 学びたい気持ちはどの子にもある
- 訪問型アプローチの重要性
- 地域でのネットワークづくりをしなければ「対処療法」に終わる
- ネットワークを実効性あるものにする技術・役割が必要
- 多様な「居場所」を増やしたい
- 中学卒業後を安全に、必要な支援を求めながら生活できるように
- 5年先、10年先を見据えて知恵を出し合う